

がん経験者の仕事に理解を

がん社会 を診る

中川 恵一

る事象が少なくありません。

「一般社団法人がんチャレンジャー」は「サバイバートラック」と名付けました。育休明けに同様の出来事が起きる「マミートラック」を参考にした造語です。

先日、「サバイバートラック」に関するアンケート調査に触れる機会がありました。

がんチャレンジャーが実施したもので、がんの告知時に仕事を持っていた211名のがん経験者を対象としたウェブ

調査です。

アンケート結果によると、「サバイバートラック」と思われる対応があったかという質問に対し、回答者の4割が「あった」と答えています。

働くがん経験者の多くが直面している問題であることが分かりました。

具体的には「責任ある仕事をさせてもらえなくなった」「仕事量を減らされた」「部署を異動させられた」などが上位を占めました。「役職を降ろされた」も少なくありませんでした。

サバイバートラックによってどのような影響があったかという質問に対して、「仕事に対するモチベーションが下がった」「メンタル不調になった」「給与が減った」が多数を占めました。「周囲との関係が悪くなった」「毎年異動させられ、退職に追い込ま

れた」という回答もありました。

両立支援の恩恵を受け、働き続けることができていたにもかかわらず、結局退職を選んでしまう社員がいることは残念でなりません。

もちろん、がん経験者のなかには体調が戻りきらず、自ら就労制限を望む方もたしかにいます。ただ、会社側が「安全配慮義務」の観点から「がん経験者には無理をさせられない」と一律に判断している面もあるかと思えます。

経験者の体調は、がんの種類や進行度の他、治療法や後遺症などによって、千差万別です。仕事への意欲や希望なども百人百様ですから、企業にはきめ細かい対応が求められます。

70歳まで働けば、会社員の2割ががんを経験しますから、がん治療と仕事の両立は非常に重要な課題です。社員の想いや希望が尊重される企業が増えることを願っています。（東京大学特任教授）

がん患者が働く「がん社会」において、「治療と仕事の両立」は重要です。厚生労働省の「がん対策推進企業アクション」（議長は筆者）でも「職域がん検診の推進」と並ぶ重要な目標となっています。その後押しもあり、以前と比べて治療を受けながら仕事を継続できる環境が整いつつあるといえます。

一方で「自分の意思とは無関係に仕事の内容や勤務時間が変わったり（減ったり）、出世コースから外れたりす



イラスト 中村 久美